



句集  
行方も花野

刈米育子



いよいよ俳境は澄明度を増し、自己の主張が明確になって来て、  
俳句がいよいよ本物になって来た。  
今後は、この一集を区切りとして、  
育子俳句が一段と輝きを増して来ることを確信し、  
期待を以って注目して行きたい。

泉田秋観

万燈の更けて浄闇よみがへる

胴掛にトロイの王や鉾廻る

寝ねがての夢に遠音の風の盆

騎馬隊の音はトロツト冬並木

異国語で道を問はれし修二会の夜

棧敷席ねぶたの闇魔襲ひ来る

不倫願望ドラマに託す夜長かな

海豹と玻璃越しのキス冬ぬくし

雲垂れてムンクの彩や海猫の町

極北に神の遺せし湖澄めり

フイヨルドの船影遅々と夏鷗

眠られぬ白夜の小鳥風わたる

八ヶ岳を背に騎馬のパレード天高し

穂芒や蝦夷地を望む風岬

火祭の佳境や消えし高嶺星

陶匠の盡きぬ咄や青葉木菟

闘病の明日を信じて月祀る

障子貼りて今年の厄を閉め出せり

御嶽の天へ継ぎ足す雲の峰

かなかなや夫病みて得しふたり刻

夫を守る  
これが終の夜  
虎落笛

冬雲や夫の  
除籍を届け  
出て

喪の妻にむしろ寧けき冬の雨

握手して冷たき指と知られけり

亡夫の眼となりて今年の花巡る

黄泉へ夫訪ふ幻想や桃すする

淋しめば聴くアヴェエマリア十三夜

高度八千機窓になほも天高き

モルダウの流れゆたけし夏柳

ボヘミアの大地の起伏麦熟れて

雛嬰粟を摘みて広野にニンフたり

異教徒へ軋む戸寒き回<sup>メ</sup>教<sup>ス</sup>寺<sup>キ</sup>院<sup>タ</sup>

着ぶくれて裸のマハにまみえけり

旅愁なほアルハンブラの寒の月

風光るギリシアの山河神話充つ

五月空支ふ遺跡のエンタシス

遺跡野の泉に映るナルシスト

雲早きネーデルランド春時雨

プードルを連れしマダムや聖五月

夏雲や継ぎ足し撮りに城の塔

吾も風の精となりたし  
飛花落花

煌々とグッチの店や  
枯葉舞ふ

うそ寒や胸に重たき癌一語

昏睡の夫撫でつくす夜は長し

霜踏めりときには鬼女の心にて

遺されてつゝのる慕情や毛糸編む

プロポーズされしその日も花月夜

来し方も行方も花野ひとり立つ

黒人の現れ春宵の闇うごく

行く雁にロッキーの空蒼極む

梅雨雲を炙りてコンビナートの火

夫恋へば天に涼しき白鳥座

人と逢ふ明日へせつせつ髪洗ふ

銀河濃しカンパネルラを捜すべく

落葉して甲斐駒ヶ岳晴れ渡る

句集 行方も花野 ゆくえもはなの

平成俳人叢書 第2期第18巻

平成十六年八月三日 発行

著者 刈米育子

発行者 大山基利

発行所 株式会社 文學の森

〒一六九・〇〇七五

東京都新宿区高田馬場二・一・二 田島ビル八階

tel 03-5292-9188 fax 03-5292-9199

e-mail [mori@bungak.com](mailto:mori@bungak.com)

ホームページ <http://www.bungak.com>

印刷・製本 堀川国彦

©Yasuko Kariyone 2004, Printed in Japan

ISBN4-902330-86-5 C0092

落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

